

**墳丘形態の復元** 1 段目については、第 6 次調査の概報における復元案を大きく修正する情報は新たに得られていないため、この復元案をそのまま踏襲する。墳丘長約 150 m、後円部径約 96 m、くびれ部幅約 55 m、前方部前端幅約 82 m となる。後円部 2 段目は 11 トレンチ拡張区で 2 段目斜面葺石の基底石が検出され、直径約 77 m に復元できる。ただし、13 トレンチで検出された 2 段目斜面基底石はこの円弧からはずれるため、2 段目に関しては円の中心がずれる可能性があるが、13 トレンチの基底石が攪乱されて動いている可能性もある。後円部 3 段目は 13 トレンチで 3 段目斜面基底石が検出され、第 6 次調査における 18 トレンチの成果と合わせて直径約 55 m に復元できる。前方部に関しては、18 トレンチ拡張区で 3 段目斜面基底石が検出されており、これを主軸で折り返すとくびれ部の 3 段目の幅は約 14 m となる。6 トレンチで検出されている前方部 3 段目斜面基底のラインと結びと、1・2 段目とその開きが異なり、主軸に対して約 4 度となる。このことから、1・2 段目と 3 段目は相似形にならないとみられる。前方部前端の幅は 2 段目が 59 m、3 段目が 27 m 程度であったと復元できる。平坦面の幅は前方部と後円部ともに、1 段目で 45 m、2 段目で 35 m 程度に復元できる。また、17 トレンチで検出された葺石から、前方部頂と後円部頂を結ぶスロープは幅 5 m 程度であったと復元できる。長さは不明だが、斜距離で 20 m 以上あったと考えられる。18 トレンチで確認された葺石の状況と 17 トレンチでの状況から、スロープは途中までは後円部斜面と同一面であったとみられる。墳丘の北と南で各斜面基底石のレベルを比較してみると、すべての平坦面で北側が 30 cm 程度高くなっている。これは北東から南西に緩やかに傾いている原地形に影響されているためであろう。各斜面基底石のレベルから、各平坦面は同一の面を形成していると復元できるが、3 段目基底石では 6 トレンチより 18 トレンチが約 40 cm 高くなっている。ほかの段と同様に前方部前端に向かって緩やかに上がっていくよう復元すると、2 段目については前方部と後円部で平坦面が連続していなかった可能性がある。1 段目斜面基底からの比高は後円部頂で約 13 m、前方部頂で復元して約 9.5 m をはかる。

**周壕形態の復元** 発掘調査で周壕の立ち上がりあるいは肩が検出されたのは 4・6 トレンチのみであるが、周壕は地山を削り出して成形していることが確認されている。従って、ボーリング調査の試料から得られた地山のレベルをもとに傾斜変換点を推定し、周壕の形態を復元することが可能となる。まず、後円部側の調査で得られた試料から想定される傾斜変換点を通る円弧を引くと、ほぼ墳丘と同心円となる。また、前方部の南側については、6 トレンチで確認された周壕の肩とボーリング調査から想定される傾斜変換点を結びと 10 トレンチ東側で後円部側の円弧とぶつかるため、周壕の外形は前方後円形に復元できる。周壕は前方部前端に向かって幅を減じている。以上、墳丘南側については発掘調査で確認された成果と矛盾することなく周壕の形態を復元できた。西側では、2 トレンチで確認された地山の傾斜変換点が周壕の立ち上がりにあたるとみられるが、それより上部は削平されてしまっている。北側に関しては調査地点の地山のレベルが高いため、ボーリング調査では明確な傾斜変換点を捉えられず、周壕を復元することが困難であった。地中レーダ探査では、南側の周壕形態を主軸で折り返した位置に傾斜変換線を捉えられず、幅が狭かったとみられる。また、地山のレベルと探査の結果を合わせることにより、前方部北側の前端よりに陸橋状の施設が付設されていた可能性が指摘された。この施設は基底で長さ、幅ともに約 10 m の規模に復元できる。このほかに周壕形態を復元できる情報として、民家の建替工事に伴う立会調査によって、後円部北側に周壕の落ち込みが確認されていることがあげられる。これらから周壕の規模を復元すると、幅は基底で後円部側 9 m 程度、くびれ部付近で 23 m 程度、前方部前端で 11 m 程度をはかり、全体としては前方後円形を呈するが、墳丘と相似形ではなく、また左右非対称である可能性が高い。(東方)